

編集にあたって

平川 新

仙台市柏木市民センターの連続講座「歴史にみる通町・堤町・北山界隈」は、二〇一〇年の六月十五日、同二十四日、七月九日の三回にわたって開催されました。おかげさまでたくさんの方の住民の方に参加していただきました。ありがとうございます。

この講座を企画したのは、講座開始のわずか三週間前のことでした。青葉神社の前、通町の角にある「検断屋敷」が解体されるという情報を聞いたことが、そのきっかけでした。

「検断屋敷」の「検断」とは、仙台藩の場合、宿場や町場におかれた役職のことをさします。伝馬や人足などの宿駅業務を取り仕切ったほか、住民の管理などもおこなっていたようです。町人から選ばれた、町政運営上の重要な役職でした。青葉神社の前にあった「検断屋敷」は、その検断職を勤めた仙台商人の菊田源兵衛家が江戸時代の後期に建てた屋敷です。蔵づくりの建物ですが、通りに面して建てられていますので、店蔵として利用されてきたのだと思われます。検断職にあった菊田家が建てたものでしたので、「検断屋敷」と呼ばれてきたのではないのでしょうか。

この菊田家の屋敷と店蔵は明治時代に人手に渡りましたが、生きた建物として近年まで利用されてきました。数十年前に撮影された写真を見ますと、道筋一带に古い家屋も残っていて、通町全体がまだ歴

史的な雰囲気を残しています。しかしその通りの家々も徐々に建て替えられて新しい住宅や店舗に姿を変えていきました。人々の生活スタイルや商売のあり方が大きく変化したのですから、当然の流れだといつてよいでしょう。そうしたなかで、古い瓦屋根とナマコ壁をもつこの「検断屋敷」は、通町の歴史的雰囲気を残す、数少ない貴重な歴史遺産となっていました。

その「検断屋敷」が消えるという現実を前にして、私たちは深い反省の念を抱かずにはいられませんでした。

一つは、この「検断屋敷」がもつ歴史的来歴や歴史的建造物としての価値について、私たち自身がどの程度承知していたのか、ということ です。二つめは、この歴史的建造物を未来に残すために私たちはこれまでに何をしたのか、という点でした。実は何も知らなかったし、何もしてこなかった、のです。だからこそ、「消える」と知って慌ててしまいました。

所蔵者の方も保存しようと努力されたと聞き及んでいます。しかし財政難の仙台市には買い上げる余裕がなかったということですし、未指定文化財であるために修復や維持に公的な助成をすることもできなかつたと聞いております。現在の制度ではこれもやむを得ないことではありますが、見方を変えようと町や地域の歴史遺産を保存継承する責任が、それを所持する個人だけに負わされている、ということでもあります。こうした問題も、私たちの眼前に一気に浮かび上がってくるようになりました。

*

*

このような現実を前に、私たちにいま何ができるだろうか、と悩みました。この問題に関心をもつ数人が集まって考えた結論が、通町の歴史講座をすぐにでも開催しましょう、ということでした。通町という町の来歴、あるいはあの「検断屋敷」や菊田家もついていた歴史的な役割などを、私たち自身の研究課題として設定する必要があると感じたからです。「消える」ということを惜しむだけではなく、「消える」

ということをきつかけに、これまで未知だった通町や「検断屋敷」の歴史を再生させてみよう、という試みでもありました。

企画からわずか三週間で一回目の講座を実施したのですが、開催を急いだ理由はもう一つありました。それは「検断屋敷」が消える前に、この屋敷の歴史と価値を地元の方々に知っていただき、最後の姿を目に焼きつけていただきたからです。いつの間にかあの屋敷がなくなっていたということではなく、江戸時代の建物が消えていくその現場にいる、ということ、多くの住民の方々に知っていただきたいと考えたからです。

講師としてすぐに名乗りをあげてくれたのが、相談の場にいた佐藤大介さん、千葉正樹さん、斎藤善之さんでした。天保の凶作関係の史料に菊田源兵衛の名前が出てくることを思い出した佐藤さんは、幕末の菊田家のことを追いかけることができるかもしれないと引き受けてくれました。仙台城下町の成り立ちに詳しい千葉さんは、通町とそれに隣り合った堤町がもつ都市史上の位置を検討してくださることになりました。流通史が専門の斎藤さんは、城下町のはずれにある通町の経済史的な位置を説明してみようと、意欲をみせてくださったのです。

このときには三人ともに、報告の根拠となるような確たる史料の当てもなかったのですが、いざ講座が始まってみると、たいへん驚きました。三人の報告はいずれも見事なほどに、通町・堤町・北山界限の歴史、それに菊田家の歴史を浮かび上がらせていたからです。わずかな時間のなかで関連史料を探し出し、それらを丹念に読み込むことで、埋もれていた歴史が一気にクローズアップされることになりました。市民の方々にも分かりやすいだけではなく、学術的にも優れた講演でした。それを一過性の報告で終わりとするのはなく、せっかく明らかになったこの地域の歴史を、未来への記録としてとどめておくことが、歴史を研究する者としての社会的役割ではないか。そのように考えて、この報告書を作っ

た次第です。

*

*

本報告書の附録として、堤人形の絵付け職人で郷土史家でもあった関善内さん（一九一〜九〇）が描いた三つの絵画を掲載しておきました。

最初のもは、「明治十一年旧第一大区七小区堤町」と題した町並み図です。画中の書き込みに、「昭和三十八年八月 乾馬の土地台帳を基本として幾人の記憶を辿って画いて見た」とあります。乾馬というのは堤町のあった七小区の区長荳司源七郎のことですので、区長宅に保管されていた堤町の土地台帳で屋敷割りなどを確認しながら描いたのでしょう。画題が「明治十一年旧第一大区七小区堤町」となっているのは、その土地台帳が明治十一年（一八七八）のものだったからではないかと推測されます。しかし善内さんは明治四十四年（一九一一）生まれですので、同十一年の町並みを知っているわけではありません。「幾人の記憶を辿って画いて見た」とあるのは、昭和三十八年（一九六三）当時に存命だった古者たちからの聞き取りをもとに、町並みを復元して描いたということでしょう。その古者たちの年齢が仮に九十歳だったとすれば生年は明治六年（一八七三）ということになりますので、明治十年代の町並みの記憶は残っていたかもしれません。八十歳台の古者であれば明治二十年代以降の記憶になるでしょう。明治十一年の土地台帳を見ながら、あの家はこんなだった、この家はあんなだったと話しながら記憶を呼び起こしている情景が目には浮かぶようです。その意味では明治十一年の写実的な町並み図ではありませんが、明治時代の堤町の雰囲気伝える貴重な風景画だといってよいでしょう。

二つめは、「昭和三十八年堤町之図」です。これは関善内さんが、その目で確認しながら描いた写実性の高い町並み図です。明治の図では茅葺きが多く瓦屋根は数える程度だったのですが、昭和の図では逆に茅葺きがわずかに残されている程度になっています。半世紀以上の時間は町並みにこうした変化を

もたらしていたのでした。この二つの町並み図を片手に現在の堤町を歩いてみれば、さらに半世紀経った町並みの変化のさまを実感することができるでしょう。善内さんの明治の図と昭和の図に続いて、平成の町並み写真を残しておく、後世の人々はさらに堤町の歴史的な変遷を、画像を通して確認することができるのではないのでしょうか。

三つめは、関善内さんの画集「おもいで」です。これは堤焼の陶工や堤町の住民の暮らしを描いたものです。堤焼は同町に住む足軽の副業として、三百年來の歴史を有しています。善内さん自身が堤人形の絵付けを仕事としていたそうなので、陶工や絵師たちの思いまで描きこまれているように感じられます。前の二つの町並み図と、人々の生業や暮らしぶりを描いたこの画集をあわせ見ると、それだけで堤町に生きた人々の姿がよみがえってくるようです。

関善内さんは、平成二年（一九九〇）に七十九歳で亡くなられたそうです。それより前の昭和五十年（一九七五）、関さんは堤焼の「おもいで」を描いた四十数枚の絵を仙台市歴史民俗資料館に寄贈されました。いつぼう、明治と昭和の町並み図は堤町にある「堤焼佐大ギャラリー」が所蔵しておられました。私たちのチームが同ギャラリーの古文書調査をおこなった際に写真撮影をしていたのですが、このたびの連続講座で堤町も取りあげることになりましたので、写真をプリントして会場に掲示をしました。本報告書では、「おもいで」も「町並み図」も、写真家の斎藤秀一さんが撮影したものを収録しております。その佐大ギャラリーですが、平成二十三年（二〇一一）三月十一日の東日本大震災により、六連あった大正期築造の登り窯のうち三連が瓦解してしまいました。かつては登り窯が並んでいた堤町でしたが、ついに佐大ギャラリーに残るだけとなっていたのです。しかし、それも大地震の被害にあってしまいました。堤町の歴史遺産が、またしても失われようとしています。

*

*

この連続講座を開催するにあたっては、柏木市民センターの岡崎修子館長さんに大変お世話になりました。急な企画の提案でしたので市民センターの部屋は一回分しか確保できませんでしたが、近くの満勝寺に依頼してくださいました。講座のために広い部屋を提供してくださいました満勝寺のご住職と檀家総代の渡辺洋一さんには、篤く御礼を申し上げます。

急な企画でしたが、通町と堤町、さらに北山界限のたくさんの方々が参加してくださいましたこともありがたいことでした。地元の歴史の話を耳をそばだてるように聞き入っておられた方々の姿が印象的でした。歴史学がどのようにすれば地域に貢献できるのか、どのような話なら多くの人々に喜んでいただけるのか、身をもって感じることができました。みなさまに、心よりの御礼を申し上げます。